

## 『邪馬台三国志』記紀と倭人伝の正しい解釈／邪馬台国盛衰記 目次 ◆邪馬台国はどこか

◆「記紀」本来の筋書と王系譜／倭国、倭奴国の生い立ち／中国と倭国の王朝変遷  
 ◆「記紀と倭人伝の正しい解釈（邪馬台国史なぞ解きの道のり）」 : 189p

## I

- ◆古代国家と宗教 ◆「記紀」と「倭人伝」のできるまで ◆「記紀」神話と「倭人伝」の信憑性  
 ◆「記紀」神話や「倭人伝」などに接する心構え ◆『古語拾遺』の信憑性 ◆『先代旧事本紀』の信憑性  
 ◆天地創造神話と倭奴国王朝（天地） ◆金印「漢委奴国王」 ◆水穗（瑞穂）国  
 ◆高天の原／虚空見つ日本の国 ◆架空とされた大倭（大日本）王八代（綏靖く開化） ◆大倭国と銅鐸  
 ◆神武（磐余彦）の実在期 ◆諸説乱立の根源／史実に迫る道のり ◆漢字の伝来時期  
 ◆倭国と天竺のかかわり ◆歴代の王朝（天之国、倭、倭奴国は大和朝廷の祖国／倭、日本国は古の倭奴国）  
 ◆熊族／熊曾（熊襲）／日隈 ◆神武と崇神の間に組み込まれた大倭王八代 ◆大倭国と豊国の生い立ち  
 ◆崇神―応神の間に挟み込まれた邪馬台国の天皇（垂仁・景行・成務・仲哀） ◆「記紀」系譜の復元一、二  
 ◆伊勢大神と熊野権現と天照大神／二人の天照大（御）神 ◆日神とヒミコ一 ◆天璽と神璽 ◆倭女王五人  
 ◆天（皇）孫三人・二人の火明・二人の饒速日／天神の御子の降臨 ◆垂仁／饒速日・天火明・火明饒速日  
 ◆一都七道制の都督（道主、景行・成務・仲哀） ◆神武と神功／海部氏系図 ◆「記紀」系譜の復元三  
 ◆伊奘諾の治世／倭国大乱と邪馬台国 ◆伊奘諾と黄泉国（月夜見国、月詭国、閻見国）  
 ◆葦原中つ国平定の大義／高皇産霊が高天原に赴く理由 ◆大己貴の国譲り／天孫降臨の裏話  
 ◆火瓊瓊杵が吾田に降臨する理由 ◆日神とヒミコ一 ◆日神の畿内遷座／女王ヒミコ／天（皇）孫の御子  
 ◆海幸・山幸彦にまつわる伝説 ◆邪馬台国史の要、海幸彦・山幸彦の争い ◆天神天照国照彦火明饒速日  
 ◆天照大神の御魂／神璽の鏡 ◆神武天皇にまつわる伝説 ◆神武東征の大義 ◆神武天皇の英雄伝  
 ◆火明饒速日とオロチの大物主神・日本大物主大神・垂仁・物部氏／神武と火明饒速日  
 ◆神功（氣長足姫）にまつわる伝説 ◆「神功紀」の信憑性／新羅遠征の時期 ◆神功皇后の英雄伝  
 ◆七枝（支）刀の伝来時期 ◆応神天皇の出自 ◆日本武尊にまつわる伝説 ◆日本武（倭建）の英雄伝  
 ◆日本武の出自と実在期 ◆日高見国の蝦夷 ◆高千穂宮四か所の所在地

## II 邪馬台国盛衰記

(水田稲作の始まり〜大和朝廷の成立)

: 95 p

倭の生い立ち

倭国大乱と邪馬台国

東西の王朝

邪馬台国の女王

日本王朝と日前の対立

天下は一つ、家は一つ(神武東征)

大和朝廷の成立

◆伊勢神宮の祭祀変遷／天璽の鏡・剣の変転

◆中国の神話と古代史

◆封禪と蓬萊三島の仙人

◆王朝の変遷2

◆家長と祭器／祭器の変遷 参考文献

古代史の常識や通説を歴史的観点から検証していくと、戦前に信じて疑うことのなかった「皇統万世一系」も、戦後に教えられた「倭では、都市国家規模の百余国が分立していた」も、「記紀」や「倭人伝」にある記述の解釈も間違いだらけだったとわかります。邪馬台国の歴史がとんと解明できない原因は、ここににあります。一から、考え直す以外にありません。

「記紀」神話〜応神の物語は、本来、倭奴国王朝が大乱後に、日向の高天(日高国+天之国、倭国)、畿内邪馬台国、出雲の葦原中つ国に割れて百年間も覇権を争った末、神武(磐余彦)が発向して、辛酉年三〇一年元旦に大和朝廷を開く王朝再興の歴史だった。その王系譜は、「神」のつく諡を連ねた、伊弉諾〜神武―崇神―神功・応神ですが、大和朝廷の為政者は、神武―崇神の間に大倭王八代綏靖〜開化を、また崇神―神功の間に垂仁・景行・成務・仲哀の邪馬台国王を挿入して一系に変えたのです。本書では司馬遷の信念に従い、記紀など資料、中国史書、伝承・神社の縁起、地名の由来、考古学成果を織り交ぜながら、神武即位が三〇一年、日神の天照大御神がヒミコに転身、大乱勃発が伊弉諾期の一八〇年代だと多角的に立証した上で、真の王系譜と史実に迫る道のりを順序立てて綴りました。同時に、天璽と神璽、素戔嗚の英雄伝、神功の英雄伝、日本武の出自、伊勢神宮の祭祀変遷、天璽の鏡・剣の変転等についても史実をとことん探求し、そのつど検証できるように綴りました。

次に、その結果を総集して短編の歴史物語、『邪馬台国盛衰記』としてまとめました。言うなれば、理路整然とした論考と歴史物語、量子物理学の解法・帰納法を介して、自説の立証を試みた次第です。論考と物語を読み進む中で、そのつど神武実在・日神がヒミコに転じた顛末等に納得されるはず。

この王朝の歴史を遡ると、光武帝劉秀が漢朝を再興した一世紀前半、天と太陽を称える倭国も地の神を祀る出雲の豊葦原中つ国と盟約し、女系天神を担ぐ王朝を再興した。それが倭奴国王朝だ。向津姫は六代天神の日嗣の御子として糸島平野の天宮で生まれ育ち、いずれ天神の日神に昇る身にあった。

その天神の御代、即ち伊奘諾が向津姫を養女に貰い受けて権勢をふるった一八〇年代中頃、東方の副都（唐古）を治める豊受皇太子（向津姫の入婿）が三輪オロチと組んで反乱した。伊奘諾は彼を討つべく東征したが、逆に北九州を蹂躪され、本拠の熊襲に逃げ込んだ。ここに、倭国と豊葦原中つ国が共立した倭奴国王朝は、分裂して崩壊した。以後、畿内大倭に天照大神（皇太子）率いる越オロチ系の邪馬台国、日向の高千穂郷に日神の天照大御神が天宮した高天の二王朝が並び立つことになる。百年後、磐余彦は以下を掲げて日向から東征し、畿内勢を討つて王朝を再興した。これが大和朝廷だ。

一、日神と高皇産霊の唱える徳と真ごころ、火瓊瓊杵と火火出見の正義の心を押し広める。  
一、日隈・熊野家を紀伊や熊野で一家にまとめ、伊奘諾夫妻と櫛御氣野を祖霊としてお祀りする。  
一、日神夫妻を皇祖皇宗としてお祭りする。一、地上での常世（古墳）づくりを皆に分ち与える。  
この時代、五帝期の神国、戦国期の呉・越・韓・楚から渡来人した末裔らが故国の伝統を引きずって互いに国を立ち上げ、競いあつて不老不死の実現、魂再来を図る神国・常世づくり、古の善政再現に奮闘してきた。大乱後は、真新しい神仙思想・儒教・仏教・バラモン教の良いとこ取りをしながら、新たな国のかたちを必死に模索してきた。

これに加えて、部族間のしきたり・宗教観の違いから多発する対立や争い事を一気に解決し、同じ価値観、同じ心の在り方・生活の決まりを共有できる国につくり変えて天下泰平の世を実現すること、とりわけ、倭奴国王朝再現が共に悲願となった。それには何としても、孫子の兵法極意「戦わずして勝つ」・「刃に血塗らずして敵をなびかせる」という偉業を見事達成して見せる必要があった。

これを叶える秘策は、十握剣、日矛、天叢雲剣の神威を敵前で振りかざすことにあった。素戔嗚の大蛇退治、高皇産霊の葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武の北伐は、その一環だったのです。